

## 創立百周年記念論文集 上巻

九州大学文学部紀要・叢書・図書委員会

<https://hdl.handle.net/2324/7358022>

---

出版情報：2025-03-31. School of Letters, Kyushu University  
バージョン：  
権利関係：

## 「第三帝国」以前の「第三の国」

——ドイツと日本におけるネオ・ヨアキム主義——

小 黒 康 正

### 一 今や我国にも「第三帝国」の声は高い

一般の理解によれば、「第三帝国」はナチス・ドイツのことを指す。一九一九年設立の「ドイツ労働者党」Deutsche Arbeiterpartei から一九二〇年に改称された「国民社会主義ドイツ労働者党」Nationalsozialistische Deutsche Arbeiterpartei の通称と言ってもよい。事実、同党が一九三〇年九月の国政選挙で大きく議席を伸ばし第二党となった勝因の一つとして、左翼・リベラルのデモクラシー体制でも反動的君主制でもない「第三の国家」を強力にアピールしたことが挙げられよう。<sup>①</sup>「第三帝国」という表現は、ナチス・ドイツ内でもあまりにも人口に膾炙されすぎたこともあり、一九三九年六月十三日付の「総統命令」で使用禁止が出されたこともあったが、<sup>②</sup>アドルフ・ヒトラー自身、一九四一年十二月十七日から十八日にかけての談話で次のように語っている。

西暦一九三三年という年は、ドイツという国家と軍の結びつきが新しくなった年にすぎないのだと私は判断をくだした。すでに失われていた「帝国」の概念が、我々にだけではなく全世界に「第三帝国」として再び銘記されたのだ。今や、ドイツという時、それは「第三帝国」以外の何ものでもない<sup>③</sup>。

ヒトラールが一九一三年五月にヴィーン（ウィーン）<sup>④</sup>を去ってミュンヘン（ミュンヘン）に移住、一九二三年十一月にミュンヘン一揆を起こし、一九三三年一月にベルリン（ベルリン）で政権を掌握したことを考えると、一九二三年から一九三三年までの十年は、ナチス・ドイツの自称であり、通称であり、俗称である「第三帝国」という言説が流布した十年であった。

しかしながら、冒頭で示した「今や我国にも「第三帝国」の声は高い」という発言はドイツではなく、日本国内で、それも一九一四年三月に発せられた言葉である。いわゆる「第三帝国」以前の発言であった。しかも、発言者の西尾実（一八八九―一九七九年）は、国文学者、国語教育学者、国語学者であって、直接、西洋を研究対象にしている者ではない。それだけに、この発言は二重、三重の意味で、興味深い。西尾は雑誌『信濃教育』大正三年三月号に掲載された「道元禪師」にて、当代の問題として「ヘブライズムとヘレニズム」を挙げている。ヘブライズムは旧約聖書および新約聖書の全体を含むキリスト教の精神文化を包含する語であり、ヘレニズムは古代ギリシアの文化・思想を意味する語であるが、西尾が「道元禪師」にて用いた語彙使用では、ヘブライズムは「中世キリスト教思想の文明」であり、ヘレニズムは「近世ギリシア思想の文明」であった<sup>⑤</sup>。近代日本において西洋思想がすでに定着していたこと、いやそれどころか、西洋の伝統的な二項対立である「ヘブライズムとヘレニズム」を近代の日本人が自分たちの問題として捉えていたことが、西尾の発言から読み取れる。すなわち、

この発言は「第三帝国」という言葉がナチス・ドイツ以前に、それも第一次世界大戦以前に日本において、少なくとも当時の知識人の間で、すでに流布していたことを示す。ナチスの「第三帝国」以前に日本で「第三帝国」という言葉が流布していたという事実に対して、現代の日本人は言うに及ばず、現代のドイツ人も、かなりの違和感を覚えるのではなからうか。

もつとも、「ライヒ」Reichをめぐる三段階の思想はヨーロッパにおいて古くから存在し、十二世紀イタリアに実在したフィオーレのヨアキム (Joachim de Floris / Joachim von Fiore、一一三五頃―一二〇二年) を出自とする。イタリア半島南西端にあるカラブリアの修道院長は、聖書の最後に置かれ、世界の終末を扱う「ヨハネの黙示録」(以下、「黙示録」)の解釈を、キリスト教の三位一体説にもとづいて行い、歴史を「父・子・聖霊」の三つの時代に分割し、旧約の時代、新約の時代が過ぎ去り、今や聖霊の時代、つまり「第三の国」が始まろうとしていると考え、この最終段階において修道生活に似た理想的な共同社会が実現すると主張した。ヤーコプ・タウベスによれば、フィオーレのヨアキムによる「三」の思想は「近代の本質を視野に入れ、近代に洗礼をさずけて革命の千年にしてしまう」<sup>⑥</sup>。事実、ヨアキムの聖霊論は千年王国への熱狂的な待望を民衆に植えつけ、中世や近世のみならず、近代以降にも多大な影響をもたらした。ヨアキムの思想が中世や近世にもたらした宗教的な影響、つまり、ミルチャ・エリアーデの言う「ヨアキム主義」<sup>⑦</sup>に対して、近代以降の社会思想的な影響を「ネオ・ヨアキム主義」と称するならば、その最たる例は、ドイツ保守革命の思想家メラー・ファン・デン・ブルックの著作『第三の国』Das dritte Reich (一九二三年)<sup>⑧</sup>であり、その書名や内容を自らの政治的プロパガンダに取り込んだナチス・ドイツであろう。同書以後の見解では、「ライヒ」をめぐる三段階としてあるのは、第一に神聖ローマ帝国(九六二―一八〇六年)、第二にドイツ帝国(一八七―一九一八年)であり、第三に一九一九年成立のヴァイマル共和

国を認めない保守勢力が求めた新たな政治体制であり、つまるところ、ナチス・ドイツの「第三帝国」であった。しかしながら、中世イタリアで生じた「三」の思想は、ナチスの語彙使用とはまったく異なる意味で用いられ、近代のドイツのみならず、ノルウェーやロシア、さらには日本や中国にも影響を与えたことは、ドイツでも一般に知られておらず、また、学術の領域でも総括的な研究はいまだなされていない。こうした状況はなぜ生じたのであるのか。そして、何がどの程度明らかにされていないのであろうか。以上を明らかにするために、まずは、ナチス・ドイツのプロパガンダである「第三帝国」das Dritte Reichという言葉と区別するために、第三の「ライヒ」をめぐるそれ以前の思想を「第三の国」das dritte Reichと称しておこう。<sup>(6)</sup>ドイツ語表記では、序数「第三」が大文字で書き始められるか(Dritte) 小文字で書き始められるか(dritte)の違となる。また、フィオーレのヨアキムが行った「三」の時代区分がそもそも黙示録解釈にもとづくものであったことも見逃せない。その意味で、「第三の国」研究の基盤となる重要な先行研究として、前近代の黙示録受容に関してはノーマン・コーン『千年王国の追求』(一九六一年)<sup>(10)</sup>、フィオーレのヨアキムに関してはバーナード・マッギン『フィオーレのヨアキム 西欧思想と黙示録の終末論』(一九八五年)<sup>(11)</sup>、近代以降の黙示録受容に関してはクラウス・フォンドウングの研究『ドイツにおける黙示録』、ゲーアハルト・R・カイザー編の論集『黙示録の詩学』、ベルント・U・シッパーとゲーオルク・プラスガー編の論集『黙示文学と無終末?』<sup>(14)</sup>などが挙げられよう。こうした代表例のほか、先行研究は枚挙にいとまがない。しかし、「ネオ・ヨアキム主義」の思想的核心となる「第三の国」に関しては、黙示録受容の中で重要な位置を占めているにもかかわらず、日本は言うに及ばず、ドイツでも、否、ドイツだからこそ、その実相は十分に解明されていないのである。

「第三の国」の言説をめぐる以上のような研究状況の中で、トーマス・マンやインゲボルク・バッハマンを考察

の中心に据えて「黙示録文化」を検討し続けてきた論者は、黙示録の解釈を三位一体説にもとづいていわば歴史化したフィオーレのヨアキム、そしてヨアキムの思想が中世や近世にもたらした宗教的な影響としての「ヨアキム主義」と近代以降にもたらした社会思想的な影響としての「ネオ・ヨアキム主義」に行き着いた。さらに、「ネオ・ヨアキム主義」の思想的核心となる「第三の国」にはドイツを中心とする西側の受容とロシアを中心とする東側の受容とがあり、両者の交点に、ドミトリー・メレシコフスキー、ワシリイ・カンディンスキー、トーマス・マンなどが存在することや、「今や我国にも「第三帝国」の声は高い」という第一次世界大戦直前の日本における言説があることに気づき、現在は「第三帝国」以前の「第三の国」を初めて本格的に検討する研究プロジェクトを立ち上げ、現在に至っている。本論は、(一) 以上の導入を踏まえて、「第三帝国」以前の「第三の国」を成立させた重要な要因として、(二) フィオーレのヨアキム、(三) 始原と終末の枠構造、(四) ヨアキム受容、(五) 「第三」と「国」、以上を順次説明し、その上で、(六) 「第三の国」をめぐる研究プロジェクトがこれまで明らかにしてきた研究成果をいわば中間報告として示す。<sup>16)</sup>

## 二 フィオーレのヨアキム

歴史を三分割する思想は、キリスト教における三位一体説とヨハネの黙示録にもとづく。父と子と聖霊という三つの位格(ラテン語の *persona*) が神の実体をなすという考えは、三二五年のニケーア公会議および四五一年のカルケドン公会議において正統とされた。キリスト教において最も重要な教義を救済史と結びつけて、いわば歴史化したのが、十二世紀イタリアに実在したフィオーレのヨアキムである。<sup>17)</sup> 歴史を三分割する思想は、二世紀後

半小アジアの宗教家モンタヌスが唱えた終末論ならびにその影響を受けたモンタニズムの運動にも認められよう。しかしながら、ヨアキムが行ったことは、三位一体説にもとづいて「父・子・聖霊」の三つの時代に歴史を分割したことであつた。

神が三位一体であるように、三つの〈時代〉の業もまた神秘の意味づけによつて神のおののおのの<sup>ベルツナ</sup>位格に対応するのである。それらはおのおのの範圍と意義によつてはつきりと區別される。そして三つの〈時代〉——そのおのおのへの特別な賜物の真なる本性から、世界の三つの〈段階〉と呼ばれるべきであるとわれわれの信じる、三つの〈時代〉がある。<sup>(18)</sup>

第一〈段階〉は父に、第二〈段階〉は子に、第三〈段階〉は聖霊に帰属する。<sup>(19)</sup>

ヨアキムはこのように考えたうえで、旧約の時代、新約の時代が過ぎ去り、いまや聖霊の時代である第三の「段階」status、つまり「第三の国」が始まろうとしていると考え、この最終段階において修道生活に似た理想的な共同社会が実現すると主張したのである。ヨアキムの聖霊論は千年王国への熱狂的な待望とともに民衆に広まり、中世や近世のみならず、近代以降にも多大な影響をもたらした。その影響を強く受けた人物としては、神聖ローマ帝国皇帝のフリードリヒ二世、聖フランチェスコ、ダンテ、宗教改革の先駆者ヤン・フス、サヴォナローラ、ドイツ農民戦争のトーマス・ミュンツァー、十五世紀ボヘミアのペートル・ヘルチキ、さらにシェリング、ヘーゲル、マルクスなどが挙げられよう。ヨアキムの特異な歴史解釈が中世末期にいたるまでのほとんどすべての預

言的信仰を包み込み、千年王国への熱狂的な待望を民衆に植えつけたことを踏まえ、ノーマン・コーンは一九六一年の著作『千年王国の追求』で次のように述べている。

十一世紀の終りから十六世紀の前半にいたるまでヨーロッパでは、生活条件の改善を求める無産階級や被搾取者階級の願望が、此岸の新しいパラダイス、苦しみと罪から浄化された世界、選ばれし者たちの王国といった空想の産物と結びつくことが繰り返された。<sup>20</sup>

フィオーレのヨアキムによる「三」の思想は、前述のとおり、近代を「革命の千年」にしてしまい、クラウス・エッケハルト・ベルシュの『国民社会主義の政治的宗教』（初版一九九八年、改訂版二〇〇二年）によれば、ある種の政治的宗教と化してディートリヒ・エカルト、ヨーゼフ・ゲッベルス、アルフレート・ローゼンベルク、アドルフ・ヒトラーにも影響が及んだのである。

もっともフィオーレのヨアキム自身は、いわゆる革命家でもなければ扇動家でもなかった。カラブリアの修道院長として、瞑想中にえた天啓によって聖書に秘められた神秘を探り、『新約と旧約の調和の書』*Liber de concordia Novi ac Veteris Testamenti*、『黙示録註解』*Expositio in Apocalypsim*、『十弦琴』*Psalterium decem chordarum*などを後世に残したいわば執筆家だったのである。とはいえ、フィオーレのヨアキムが生きた時代が十字軍の時代であり、ヨアキム自身が敵対するイスラム社会を終末論的に理解していた点は見逃せない。第三次十字軍（一一八九～一一九二年）に参加したイングランドのリチャード獅子心王（一一五七～一一九九年）はシチリアのメッシーナでフィオーレのヨアキムに会見した。その際、ヨアキムは、サラデインの没落、エルサレムの回復、反キリストの



到来を予言したのである。イスラム勢力は、キリスト教的な終末論を意識に抱いていたヨアキムにとって、第三の「段階」到来直前に出現する反キリストの勢力にはかならない。こうしてカラブリアの修道院長は終末の預言者として生前に名声を博していたが、生前の名声以上に、やはり後世への影響は大きい。その際、ヨアキムの思想的核である三位一体説の歴史化は、正統とされたアウグスティヌスの教えと大きな断絶を有した。端的に言えば、ヨアキムの思想は、目的の成就が人間の歴史内で果たされるという点で、アウグスティヌスのそれと決定的に違う。アウグスティヌスにおいては、千年王国あるいは第三の「段階」はキリストの降誕とともに始まり、彼の再臨と最後の審判によつて終わる。アウグスティヌスはあくまでも超越論的、観念的な理解に終始していた。これに対してヨアキムの場合、千年王国はまだまだ到来していない。その実現は、現世において反キリストが倒れたとき、つまり人間の歴史内において始まる。原始キリスト教において顕著であった千年王国の到来は、それも第三の「段階」の成就是、近い将来に起こるのではないか。こうした意識が古い世界の打破と新しい世界の樹立をめざした行動へと人々を駆り立てた。ヨアキムの思想によつて培われた待望感は、終末論的色彩の強い過激な運動へとしばしば転化し、社会革命的な民衆運動へと発展したのである。

かつて、民衆、とりわけ農民は、黙示録に描写された戦争や災厄などの豊富な没落のヴィジョンに自分たちの現実を見、古い世界から新しい世界への転換の記述に繰り返し熱狂した。ノーマン・コーンが示した「千年王国の追求」は、黙示録の記述をいわば歴史的に理解する民衆の待望感であり、トーマス・マンの言葉を援用すると、「黙示録を夢みるとき」<sup>(22)</sup>ではなかったか。そもそも、フィオーレのヨアキムが行った三位一体説の歴史化はヨアキム独自の黙示録解釈にもとづく。バーナード・マッギンに依拠して、一つの読み解きを示しておこう。黙示録の第十七章で登場する獣が有する七つの頭の意味を、ヨアキムはリチャード獅子心王や廷臣たちに読み解く。まず

は黙示録の当該箇所を示しておこう。

七つの頭とは、この女が座っている七つの丘のことである。そして、ここに七人の王がいる。五人はすでに倒れたが、一人は今王の位についている。他の一人は、まだ現れていないが、この王が現れても、位にとどまるのはごく短い期間だけである。<sup>(24)</sup>

七つの頭とは、フィオーレのヨアキムによれば、すでに倒れた五人の迫害者、ヘロデ、ネロ、コンスタンティウス二世、ムハンマド、メルセムトゥス（北アフリカのムーア人）と、第六の迫害者として王の位についているサラディンと、いまだ現れていない第七の王、つまり反キリストであった。「反キリスト」という言葉は黙示録に由来する言葉であるが、これに対して、「三位一体」という言葉そのものは聖書そのものの中で明確に記載されていないこともあり、多様な解釈を生み出すことになった。<sup>(25)</sup>三位一体説の歴史的解釈もそうした諸説の一つであるが、後世に対する影響はきわめて大きい。ヨアキムの思想は、神学と歴史、宗教と政治、神学的な救済史と近代的な目的論などを結びつける動力を有していたと言えよう。上述のクラウス・エッケハルト・ベルシュは、ナチスのイデオロギーが有する宗教政治的な前史を問題にした際、歴史を三分割しながら黙示録を解釈したフィオーレのヨアキムにふれ、そのうえで黙示録を「歴史神学の母」「近代の歴史目的論の祖母」と名づけていたのである。<sup>(26)</sup>

### 三 始原と終末の枠構造

聖書の最後に配され、歴史の最終段階を示すヨハネの黙示録は、その独特の時間的プログラムでヨーロッパの歴史意識を形成し、諸芸術に多くの素材を提供し続けてきた。黙示録の著者は、ヨハネによる福音書やヨハネの手紙の著者であるヨハネ、つまりイエスの愛弟子であったヨハネではなく、小アジアのキリスト教団で著名な別のヨハネであったとされる。後者のヨハネが、パトモスと呼ばれるギリシアの島に流された際、紀元後の九四年か九五年に自らが体験した幻視をいわば預言として書いた著作が、ヨハネの黙示録であった。後期ユダヤ教の重要な運動の結果として、紀元前三世紀から初期キリスト教の時期にかけて、数多くの終末論的預言が成立したとされている。その総称である「黙示文学」Apokalyptikの中で、旧約聖書のダニエル書とともに正典として採用された著作がヨハネの黙示録、ドイツ語表記だと、*Die Offenbarung des Johannes*もしくは*Apokalypse*であった。ヨハネの黙示録は、イエス・キリストによる新しい契約を中心に書かれた新約聖書の中で、黙示文学の特徴として「契約」よりも「啓示」*Offenbarung*が重視されている正典である。

同書は、二十二章から構成されており、内容上、第一章の召命の幻視、第二章と第三章の七つの教会への手紙、第四章から第二十二章までの本来の黙示の記述といった三部から成り立つ。第三部の末尾では、キリストの再臨と神の国の到来が望まれているが、ヨハネが次々に見る異様な幻視にこそ黙示録の黙示録たる由縁があろう。天変地異、七つの封印、七つのラッパ、七つの鉢、黙示録の四騎士、二匹の獣、数字「六六六」、ハルマゲドン、天使ミカエル、メシアの戦い、白馬の騎手、ゴグ・マゴグ、竜と子羊、大淫婦バビロンと花嫁エルサレムなど、いずれも後世の芸術や思想に多くの素材と影響を与えたものだ。著者ヨハネは数多くの異様な出来事を歴史の最終

段階において教会が耐えねばならない苦難として伝え、預言者の權威をもって小アジアの諸教会に勧告と慰めを与える。

黙示録が示す最終段階の叙述は、執筆当時の歴史上の事件、とりわけローマ皇帝ネロ（五四―六八年）や皇帝ドミティアヌス（八一―九六年）によるキリスト教徒迫害をアレゴリ的に描いたものであった。黙示録が危機意識の言語表現として人々の意識もしくは無意識の中に染みわたってきただけに、同書には、天変地異や社会的危機に立たされた人々の不安と希望を取り込む力があつたとも言えよう。その力は、普段はさまざまな非合理を謎と幻想とアレゴリーの形で宿しながら影を潜めているが、耐えがたい危機が人々を襲うとき、突如として歴史の表舞台で猛威を奮う。そして束の間の陶酔の後、黙示録を出自とする言説は、新たなものを吸収し、歴史的経験によって増殖しながら原テキストにいわば還っていく。トーマス・マンのいう「回歸する諸モティーフに満たされたきわめて濃密な伝統領域」が形成されるのだ。<sup>(28)</sup>これがすなわち「黙示録文化」<sup>(29)</sup>である。

黙示録文化は、聖書の「クロノ・トポスの枠構造」*eine chrono-topische Rahmenstruktur* にもとづく。聖書は冒頭の創世紀において世界の始原をエデンの園として描き、最後の黙示録において世界の終末と、終末の終末に出現する新しいエルサレムを示す。<sup>(30)</sup>終末という「時間」<sup>クロノス</sup>に出現する新たな「場所」<sup>トポス</sup>は、失われた楽園の復元にほかならない。ただし、新しいエルサレムはかつてのものとは違い、自然の中の楽園ではなく、寶石からなる人工的な都市であるだけに、自然ではなく人工を、庭園ではなく都市を、有機的空間ではなく無機的空間を志向する。始原から終末へという時の流れは、一方で聖書の冒頭から最後まで展開であり、他方で庭園から都市への移行とも言えよう。<sup>(31)</sup>このような「始原と終末の枠構造」にもとづく救済史観は容易に終末論へと傾き、<sup>(32)</sup>人々に自分たちの歴史的位置を問い続けさせた。こうした問いかけは、クラウス・フォンドゥングによれば「不足と充足の緊張

関係」を、ジャック・デリダによれば「理性の声を雑音で妨害し理性の声の調子を狂わせる、あるいは混乱させる」黙示録的語調を繰り返し私たちにもたらしただのである。<sup>(33)</sup>

聖書の冒頭



聖書の最後

創世記

黙示録

始原

終末（かつ始原）

エデンの園

「人類の歴史」

新しいエルサレム

楽園（庭園）

神の国（都市）

自然（有機的空間）

人工（無機的空間）

このような切迫感においては、歴史全体を見るまなざしとともに、始原と終末の間にある人類の歴史を分割する意識が強く働く。黙示録そのものは、「七」という数字にもとづいて終末を示す。しかしながら、黙示録の受容史においては、切迫感が過度に働くなかで、一方に「千」にもとづく時代区分によって「千年王国」が、他方に「三」にもとづく時代区分によって「第三の国」が希求された。前者は黙示録第二十章の記述にもとづき、後者はフィオーレのヨアキムによる黙示録解釈に端を発するだけに、ともに黙示録と密接な関わりを有する。総じて中世に熱狂的に希求された「千年王国」が宗教的かつ善悪二元論的であるとすれば、近代に入ってからかく歴史哲学

的に求められた「第三の国」は世俗的かつ弁証法的であったと言える。

#### 四 ヨアキム受容

本論が問題とする「三」の時代区分は、千年王国説と密接に関わりながら、前述のとおり、フィオーレのヨアキムによって提示された。カラブリアの修道院長は、まさに十字軍の時代に敵対するイスラム勢力を終末論的に把握しながら、三位一体説にもとづく独自の解釈を黙示録に対して行ったのである。歴史が、父、子、聖霊の三つの段階に分割され、「旧約の時代」「新約の時代」が過ぎ去り、今や「第三の段階」*der dritte Status*である「聖霊の時代」が始まろうとしていると、ヨアキムは言う<sup>34</sup>。アウグスティヌスや中世の教父哲学では「神の国」はあくまでも超越論的であって、その成立年を算出するなど思いも及ばぬことであったが、ヨアキムの聖霊論においては目的の成就が人間の歴史内で果たされるという観点から千年王国の始まりを算出可能とした。もともとヨアキムは異端の誹りを免れるために正確な算出をあえて行わなかったと言われている。しかし、ヨアキムのいわば反アウグスティヌスの解釈は、先に述べたとおり、中世末期に至るまでのほとんどすべての預言的信仰を包み込みながら、千年王国への熱狂的な待望を民衆に植えつけることとなった。民衆、とりわけ農民は、黙示録に描写された没落のヴィジョンに自分たちの現実を見、古い世界から新しい世界への転換の記述に熱狂し、古い世界の打破と新しい世界の樹立をめざした行動へと駆り立てられたのである。しかも、ヨアキム独自の聖霊論は十六世紀のドイツ、とりわけトーマス・ミュンツァーやミュンスター再洗礼派による急進的な宗教改革運動に多大な影響をもたらしただけではない。一四五三年のコンスタンティノープル陥落後は、ロシアにおいても独自の展開を

遂げた。すなわち古代ローマと第二のローマであるコンスタンティノープルとが亡びた後、真のキリスト教信仰は「第三のローマ」であるモスクワにおいて保持されるという思想が民衆に根強く広まったのである。<sup>(35)</sup>

ヨアキムの思想が中世や近世にもたらした宗教的な影響であるヨアキム主義において、「第三の国」は「聖霊」*der heilige Geist*の時代として措定された。これに対して、同思想が哲学的・弁証法的に近代以降にもたらした影響、すなわち、ネオ・ヨアキム主義において、「第三の国」は「聖霊」の時代というニュアンスを残しつつも、次第に「精神」*der Geist*の時代というニュアンスを強めていく。こうした意識の変容は、ヨアキム的な時代区分を啓蒙主義に持ち込んだゴットホルト・エフライム・レッシング（一七二九―一七八一年）に認められる。<sup>(36)</sup> レッシングが『人類の教育』（一七八〇年）において言及した「第三の時代」は、ドイツのロマン主義的な自然哲学によって刻印された「第三の国の約束」*die Verheißung des Dritten Reiches*となり、さらにフランスにおいてウジェーヌ・ロドリゲスによる『人類の教育』の仏訳によってサン＝シモン主義と合流し、<sup>(37)</sup> その合流が再び十九世紀前半のドイツにおける思想的潮流である「若きドイツ」に、一八三一年にバリに移住したハインリヒ・ハイネにとりわけ多大な影響をもたらした。サン＝シモン主義の影響下で精神と肉体の調和をめざしたハイネは、物質と世界の魂の再婚を求める新たな福音をレッシングに認めながら、「第三の教会」の建設をめざしたのである。一八四四年に刊行された『新詩集』所収の詩「セラフィーヌⅦ」の第一連を引用しておこう。

我らがこの岩の上に建てる

教会は第三の

第三の新しい契約の教会

苦しみは消え去った<sup>(39)</sup>

このようにネオ・ヨアキム主義の思想的展開は、特定の言語に限定されない汎ヨーロッパ的な運動でもあった。こうした潮流を十九世紀後半において演劇というジャンルで展開させた人物として、ノルウエーの劇作家ヘンリック・イプセン（一八二八―一九〇六年）の名を挙げておかなければならない。イプセンは、一八六八年、四十歳のとき、ドイツのドレーズデンに居を移し、一八七〇年、ヘーゲル誕生百年祭が行われているベルリンを訪れた際、ヘーゲルによって定式化された弁証法によって世界を捉えることを学んだ。これを踏まえ、歴史劇『皇帝とガリラヤ人』をノルウエー語で書き、一八七三年に世に問うた。これは古代ローマの背教者ユリアヌスを主人公とした二部構成の歴史劇で、第一部「カエサルの子（五幕の劇）」と第二部「皇帝ユリアヌス（五幕の劇）」から成り立つ。この壮大な歴史劇は、宗教哲学的な要素を多分に有するゆえ、舞台上演に適したビューネドラマというよりも、舞台上演に適しないレーゼドラマと言えよう。その宗教哲学的な要素とは、四世紀に実在した新プラトン主義者であるエフェソスのマクシムスが若きユリアヌスに諭す「第三の国」の教えにほかならない。

マクシムス 帝国には三つある。

ユリアヌス 三つ？

マクシムス 第一は、知識の木に建設されたその帝国。それから、十字架の木に建設されたその帝国――

ユリアヌス で、第三は？

マクシムス 第三は、いとも神秘的な帝国だ。知識の木と十字架の木を一つにしてその上に建設されるべき



帝国だ、と言うのも、この二つは憎み合つて愛し合い、それにその生命の源がそれぞれのアダムの墓の下とゴルゴタにあるからだ。

ユリアヌス で、その帝国は誕生するのか——？

マクシムス 間もなくな。わたしは幾度も計算した——<sup>(40)</sup>

ユリアヌス 光の中であの声は——？（叫んで）帝国だ！帝国？帝国を建設する——！

マクシムス 第三の帝国だ！<sup>(41)</sup>

ここで使用した原千代海訳における「第三の帝国」という表記は、本書における論述だと「第三の国」が該当する。マクシムスが語る「第一の帝国」は「知識の木」にもとづく古代ギリシアの世界を指し、「第二の帝国」は「十字架の木」にもとづくキリスト教の世界を指す。マクシムスのさらなる説明によれば、前者は「肉の王国」を実現する皇帝が、後者は「精神の王国」を実現する神が担う。こうした古代と近世が錯綜した言説の中で、近代的な弁証法的世界が示されるのである。

ユリアヌス 皇帝にして神、神にして皇帝、精神の王国における皇帝——そして肉の王国における神。

マクシムス それが第三帝国です、ユリアヌス！<sup>(42)</sup>

古代ギリシア的な肉の王国とキリスト教的な精神の王国を弁証法的に統合するのが、原千代海訳によれば、「第三

の帝国」もしくは「第三帝国」であった。東方遠征中の皇帝ユリアヌスは、三六三年、投げ槍を受けて陣中で没した際、イエス・キリストを意識して「ガリラヤ人、汝は勝てり」という言葉を発したと言われている。こうした伝説はイプセンの歴史劇にも巧みに取り込まれ、虚構のユリアヌスは背教者として「第三帝国」到来の幻視とともに命を落とすのであった。

ユリアヌス〔前略〕おれは負けないぞ！おれは若いんだ、——おれは不死身だ、——第三帝国はすぐそこ

だ——（大声をあげ）あそこに、あいつだ！

〔中略〕

ユリアヌス（幻に近づき、おどして）去れ！貴様は死んだ。貴様の帝国は終ったんだ。その妖術師の服を脱げ、大工の倅！<sup>(43)</sup>

イプセンは『皇帝とガリラヤ人』を刊行した一八七三年の二月十三日に旧友ドーニエ宛の手紙で「僕の戯曲は、世界史の中で和解しえない二つの力の間に起こる格闘——常に繰り返して起こるであろう格闘を扱っている。そういう一般性から、僕はこの作品を『世界史劇』と呼んでいる<sup>(44)</sup>」と記した。つまり、イプセンの歴史劇は、過去におけるキリスト教と異教の確執を現代の問題として再現する。

イプセンを介して大きく展開したネオ・ヨアキム主義は、イプセンの作品群が社会に強い影響を与え、『皇帝とガリラヤ人』の独訳が一八八八年に出たドイツ語圏において、とりわけ顕著であった。ニーチェ受容に関する最初の資料を残したレーオ・ベルク、ドイツ語でも執筆を行ったポーランド人作家スタニスワフ・プシビシェフス

キ、プシビシェフスキの友人リヒャルト・デーメル、徹底的自然主義の代表者ヨハネス・シュラーフ、教育学者エルンスト・クリーク、ヨーロッパ中心の歴史観を批判したオスヴァルト・シュペングラ―、国民社会主義ドイツ労働者党の設立者ディートリヒ・エカルト、保守革命の論客メラ―・ファン・デン・ブルック、ヴィーンの観相学者ルードルフ・カスナー、二つの世界大戦で重要な役割を果たしたトーマス・マン、スイスに帰化したヘルマン・ヘッセ、マルクス主義哲学者のエルンスト・ブロッホなど、以上の人物たちは、一般にはあまり知られていないが、立場の違いを超えてネオ・ヨアキム主義に深い関わりがある。

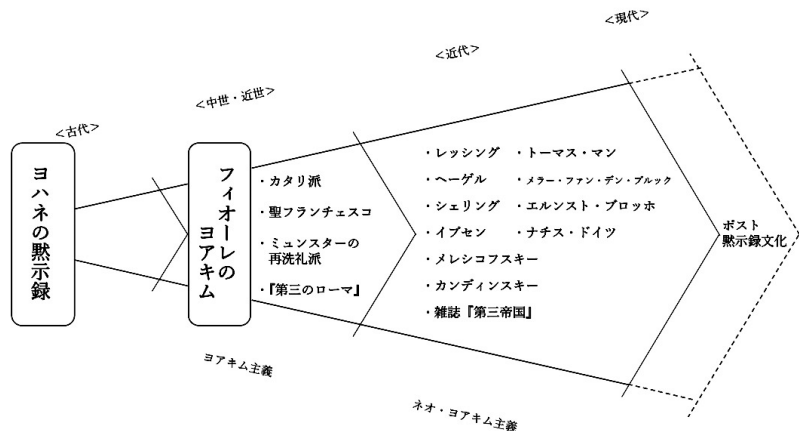
一四五三年のコンスタンティノープル陥落後、東西に分裂した「三」の時代区分は、ナチスの「第三帝国」が台頭する以前のドイツにおいて、多様な展開を遂げていた。ただし、ネオ・ヨアキム主義の思想的核心となる「第三の国」の思想は、西側のみならず、東側にもあったことを忘れてはならない。モスクワをめぐる「第三のローマ」説は、三位一体の宗教を呼びかけたメレシコフスキーや抽象絵画の到来を「第三の黙示」と見なしたカンデンスキーに確認できる。さらにメレシコフスキーがメラ―・ファン・デン・ブルックやトーマス・マンに多大な影響を与えたこと、そして、カンデンスキーがミュンヘンで抽象絵画の第一歩を踏み出したことを踏まえると、ドイツこそ第三の国をめぐる東西融合の場であったと言える。もともと、同時期に、いや、見方によっては、ドイツよりも先に第三の国の東西融合を果たしたのが、実は日本であった。ただし、これも後に考察することだが、ドイツにおける東西融合でも、日本における東西融合でも、文脈を異にしながら、ともにイプセン受容ならびにメレシコフスキー受容が大きな役割を果たしたことに、本論は注目したい。イプセンを介して大きく展開したネオ・ヨアキム主義は、レーオ・ベルクが一八九七年に上梓した『現代文学における超人』でイプセンを「第三の国のメシア」と命名した点でドイツにとどまらない汎ヨーロッパ的な潮流であり、さらに言えば、ドイツ

と同様にイブセンの作品が社会に決定的な影響を与えた日本においてイブセンが「第三王国の預言者」と称された点でヨーロッパにとどまらない超ヨーロッパ的な潮流でもあった。

## 五 「第三」と「国」

ヨアキム主義そしてネオ・ヨアキム主義を支えるのは、ヨハネの黙示録、黙示録解釈によって培われた黙示録文化、そして、キリスト教的な歴史意識の根底にある始原と終末の枠構造であった。もともと、そうした枠構造を分割する際に好んで用いられた数字の「三」*der, xara*には、とりわけネオ・ヨアキム主義において分割のイメージで捉えられた「国」*Reich*についても、ここで補足説明しておく必要がある。

「三」という数字は、キリスト教文化圏のみならず、他宗教の文化圏においても、重要な意味を付与されており、古今東西にわたって特に宗教の分野である種のリズムを作り出してきた。キリスト教における父と子と聖霊という三位一体説に似たリズムとして、古代エジプトにおいてオシリス、イシス、ホルスの三神が一体と



( 黙 示 録 文 化 )

されていたこと、ヒンドゥー教においてブラフマー、ヴィシュヌ、シヴァの三神は三神一体であることなど、多くの宗教から三柱神の事例が挙げられよう。<sup>(45)</sup> 仏教においては、経蔵、律蔵、論蔵の聖典を総称して三蔵、現象世界の一切の事物の実相を示す真理を三諦、仏（ブツダ）と法（カルマ）と僧（サンガ）という宝物を三宝<sup>(46)</sup>といい、仏道修行者が修めなければならない戒、定（禪定）、慧（智慧）は三学と称されている。もともと、「三」のリズムは西洋において宗教以外の分野でも古代からとりわけ多い。ギリシア数学で難問とされた円の方形化、立体倍積、角の三等分は三大問題であり、西洋の伝統的論理学の推理論において間接推理と総称される推論は三段論法と称された。近代の例を一つ挙げておくと、フランスの社会学者オーギュスト・コントは人類発展の「人類の知的進化の法則」として神学的もしくは虚構の段階、形而上的もしくは抽象的な段階、科学的もしくは実証的な段階、以上の段階に人類の歴史を分割したのである。

数字の「三」は、キリスト教文化圏において人口に膾炙された「イエス・マリア・ヨセフ」という三幅対が示すように、民間信仰においても数多くの事例を認めることができる。<sup>(47)</sup> とりわけグリム兄弟編纂の『子供と家庭のためのメールヒェン集』Kinder- und Hausmärchen<sup>(48)</sup>には、「三」のリズムが頻出する。同書には、高橋吉文によれば、三人の王子が順に怠けぶりを競う「KHM 一五一 三人の怠け者」が典型的に示すように三度の反復という語り口が頻出するだけではなく、「KHM 三十三 三つの言葉」や「KHM 十四 三人の糸紡ぎ女」などのように、前半に三度、後半にも三度のいわば「三の三」形式をもつものも少なくなく、しかも、「KHM 一 蛙の王子さま」のように、もともと三度反復でなかったものですらグリム兄弟によって意図的に書き直されて三度反復にされたものがあった。<sup>(49)</sup> グリム兄弟による『メールヒェン集』の改稿過程において「三」のリズムが強く働いていたことは間違いない。その証左として、「KHM 十四」は「苦しみの亜麻紡ぎ」（初版）から「三人の糸紡ぎ女」（第七版）

に、「KHM 十六」は「なんでもござれ」(初版)から「三枚の蛇の葉」(第七版)に、「KHM 三十三」は「長靴をはいた牡猫」(初版)から「三つの言葉」(第七版)に、「KHM 六十三」は「黄金の子供たち」(初版)から「三枚の羽」(第七版)に、「KHM 七十」は「オケルロ」(初版)から「三人の幸運児」(第七版)に、「KHM 一二〇」は「兵隊と指物師」(初版)から「二つ目、二つ目、三つ目」(第七版)に変更されていた<sup>30)</sup>。

以上の事例だけでも、「三」のリズムが、古今東西を問わず、意識的であれ、無意識的であれ、人々の心に刻まれ続けてきたことが分かる。こうした心への刻み込みは前近代のみならず、近現代においても問題となろう。ジークムント・フロイト(一八五六―一九三九年)は晩年の著作『精神分析入門・続』(一九三三年)の第三十一講「心的な人格の解明」においてやはり「三」のリズムで自説を展開している。フロイトによれば、人間の心的な装置は「超自我、自我、エス」という三つの領域にもとづく。なかでも私たちの自我は、「三人のうるさい君主」であり「三人の暴君」である「外界、超自我、エス」に仕えているため、「三つの方向」から圧迫され、外界に対する現実不安、超自我に対する良心の不安、エスの内部の情熱に対する神経症的な不安、以上の「三つの危険」に脅かされている。こうした自説展開の際に、三つの領域は「三つの王国」*drei Reiche*とも称されていた。それは、一九三三年、フロイト七十七歳の時であり、皮肉なことに、ヒトラーの「第三帝国」*das Dritte Reich*が政権を掌握した年でもあった。

人間の精神的営為における「三」のリズムとは、そもそも個人の意識や無意識の問題ではなく、もしかすると集合的無意識の産物ではなからうか。このように問わざるをえないのは、古今東西において、とりわけ西洋において、「三」のリズムがあまりにも多く頻出するからだ。ただし、「三」を重視していたフロイト、少なくとも晩年のフロイトとは違い、C・G・ユング(一八七五―一九六一年)の場合、奇数の「三」よりも、偶数の「四」

を、それも「心」Psycheの原始類型としての「四」を重視していた。<sup>(32)</sup> ユングの『心理学と錬金術』（一九四四年）によれば、キリスト教の影響下にある錬金術は三位一体的（unitarisch）、異教の影響下にある錬金術は三体一組的（tridisch）であるが、そもそも錬金術には四大（地・水・火・風）の統一に対応するものも少なくない。錬金術の中心的な諸表象に見られる「三」と「四」の錯綜は、ユングにとって、意識と無意識をめぐる錯綜でもあり、つまるところ、男性的なもの、父なるもの、精神的なものを示す「三」と女性的なもの、母なるもの、肉体的なものを示す「四」の葛藤でもあった。ユング的な見方をする、男性的な「三」のリズムに第四番目の女性的なものが加わることで、人間の「心」も世界も全体性を獲得する。別言すると、全体の半分しか捉えていない奇数の「三」ではなく、偶数の「四」こそが全体を捉える最小単位となろう。現代物理学が三次元的思考から四次元的思考に移ったように、現代心理学としての深層心理学も「三」ではなく「四」を「心」の原始類型として重視しなければならない。そうユングは考えたのである。三位一体説を構成する「父」Vaterも「子」Sohnや「聖霊」Geistもドイツ語ではすべて男性名詞であることも、キリスト教文化圏において古くから民衆にマリアに対する信仰があるにもかかわらずマリア崇拜が教義において認められていなかったことも、ユングにすれば、決して偶然ではない。ユングは、晩年の著作『結合の神秘』（一九五五／一九五六年）において、フィオーレのヨアキムに由来する聖霊運動への傾きが錬金術にあったことを指摘した上で、<sup>(34)</sup>「キリスト教の三位一体が三位一体として成り立ちうるのは、神のドラマに関与する第四の登場人物を排除しているからにすぎない」と述べていた。<sup>(35)</sup> つまり、キリスト教の三位一体説も、「第三の国」を求めるヨアキム主義ならびにネオ・ヨアキム主義も、マリア的なものの排除にもとづく。このように原始類型としての「四」が排除されてきたからこそ、この欠損を埋めようとする心理的な欲求として、教義によって排除されたマリアに対する信仰が民衆の間に根強く存在し、そうした風潮に押

されて、一九五〇年、聖母昇天を啓示された真理であると当時のローマ法王は宣言するにいたったのである。<sup>(56)</sup>

ヨアキム主義もネオ・ヨアキム主義も、欠損を補おうとする「四」のリズムが意識の背後にあるにしても、ともに「聖霊」もしくは「精神」を求める男性的な「三」の運動であった。それだけに「第三」*der dritte* と言いたい回しはとかく父権的なイメージを伴う「国」*Reich*と結びつきがよい。*Reich*というドイツ語は、「ローマ帝国」*das Römische Reich*のように「帝国」*Kaisereich* とも、「デンマーク王国」*Königreich Dänemark* のように「王国」*Königreich* とも、「神の国」*das Reich Gottes* のように宗教的なニュアンスをもつ「国」とも訳せる。同語は、地方行政単位である「ラント」*Land* の上位概念として、国家や国民の全体を表す幅の広い意味をもち、しかも日本語における「全国」に近い意味をもつが、単なる統治体を表す概念ではない。というのも、ケルト語由来のこの語は、フェルキツシュ思想の系譜において、国粋主義的、権威主義的、反民主主義的なニュアンスをもつにいたって、現在では使用されない特殊な歴史概念になってしまったからである。<sup>(57)</sup> こうした特殊性を踏まえて当該のドイツ語を「ライヒ」とカタカナで表記するのも一案であろう。しかしながら、本論では、ナチス・ドイツの政治的プロパガンダである「第三帝国」*das Dritte Reich* と区別するために、それ以前の「ライヒ」をめぐる歴史三分割の思想を「第三の国」*das dritte Reich* と称することにした。こうした区別のほかに、本論では、当該ドイツ語を「帝国」でも、「王国」でも、「ライヒ」でもなく、あえて「国」と訳出したのは、宗教的なニュアンスを意識してのことである。前近代における宗教的なヨアキム主義も、近現代における疑似宗教的もしくは宗教政治的なネオ・ヨアキム主義も、ともにヨハネの黙示録解釈によって培われた黙示録文化の所産であったからだ。



## 六 「第三の国」の諸相

本論がこれまで考察したフィオーレのヨアキム、始原と終末の枠構造、ヨアキム受容、「第三」と「国」、以上は「第三の国」という言説のみならず、ナチス・ドイツのプロパガンダである「第三帝国」を成立させた要因でもあった。もともと、「第三帝国」が一九三三年から一九三三年までの間にナチス・ドイツの自称、通称、俗称として定着し、一九四五年のドイツ無条件降伏まで、いやそれどころか、現在にいたるまで広く知られた名称であるのに対して、「第三帝国」以前の「第三の国」はかつてイプセンやメレシコフスキーを通じて国際的に流布し、トーマス・マンが繰り返し使用し、「第三の国」という理念そのものを革命概念としてナチス・ドイツから奪還しようとした試みがあったにもかかわらず、今ではその多様な内実がほとんど知られていない。「第三帝国」は、反民主主義的、反自由主義的、反ユダヤ主義的な偏狭な思想であり、多様性を有しない国粹主義的な思想の極みだった。これに対して思想としての「第三の国」には、「第三帝国」とは真逆のベクトルが総じてあったと言える。

「第三帝国」は大ドイツ主義ゆえの偏狭なナショナルな思想であったが、「第三の国」はドイツのみならず、ノルウェーやロシア、さらには日本にも広まっていたいわばトランス・ナショナルな思想であったのである。もともと、「第三帝国」以前の「第三の国」をめぐる多様な展開は、日本のみならず、ドイツでも一般に知られておらず、また、学術の領域でも総括的な研究はいまだなされてこなかった。こうした状況の中で立ち上げられたのが、先に述べた研究プロジェクトであったのである。<sup>(58)</sup> 本論は多様な「第三の国」の実相を一覧表にまとめたうえで、最後に総括しておきたい。

ゴットホルト・エフライム・レッシング（一七二九―一七八一年）は、『人類の教育』（一七八〇年）において、

「第三の国」一覧

| 名前（生没年）                              |                | 第一の国         |               | 第二の国                   |                      | 第三の国              |  |
|--------------------------------------|----------------|--------------|---------------|------------------------|----------------------|-------------------|--|
| フィオーレのヨアキム<br>（一二三三）～（一二〇〇）年         |                | 父に帰属する第一（段階） |               | 子に帰属する第二（段階）           |                      | 聖霊に帰属する第三（段階）     |  |
| ゴットホルト・エフライム・レッシング<br>（一七二九）～（一七八一年） |                |              |               |                        |                      | 第三の時代、新しい永遠の福音の時代 |  |
| ヘンリック・イブセン<br>（一八二八）～（一九〇六年）         | 父の国（古代ギリシアの世界） |              | 子の国（キリスト教の世界） |                        | 精神の国                 |                   |  |
| ヨハネス・シュラーフ<br>（一八六二）～（一九四一年）         |                |              |               |                        | 新しい個性、新しい男と新しい女、第三の人 |                   |  |
| ドミトリー・メレシコフスキー<br>（一八六六）～（一九四一年）     | 異教、肉体          |              | キリスト教、精神      |                        | 聖霊の王国、第三のローマ         |                   |  |
| ワシリー・カンディンスキー<br>（一八六六）～（一九四四年）      |                | 物質主義         |               | 新しい精神の国、第三の黙示、抽象<br>絵画 |                      |                   |  |
| 茅原華山（一八七〇）～（一九五二年）                   | 明治維新までの日本      | 明治の日本        |               | 日本人による世界的帝国            |                      |                   |  |
| ルードルフ・カスナー<br>（一八七三）～（一九五九年）         | 顔の国            | 仮面の国         |               | 自分自身                   |                      |                   |  |
| トーマス・マン<br>（一八七五）～（一九五五年）            |                |              |               | 宗教的人間愛の第三の国としての共和国     |                      |                   |  |
| メラ・ファン・デン・ブルック<br>（一八七六）～（一九二五年）     | 神聖ローマ帝国        | ドイツ帝国        |               | 第三の党、新しい最終の国           |                      |                   |  |
| パウル・フリードリヒ<br>（一八七七）～（一九四七年）         |                | 物質主義         |               | ツァラトゥストラが呼びかける「汝の国」    |                      |                   |  |
| ユーリウス・ペーターゼン<br>（一八七八）～（一九四一年）       |                |              |               | 「総統」に導かれた「新しい国」        |                      |                   |  |
| オスヴァルト・シュペンクラー<br>（一八八〇）～（一九三六年）     |                |              |               | 永遠の明日                  |                      |                   |  |
| エルンスト・ブロッホ<br>（一八八〇）～（一九五九年）         |                |              |               | 社会主義革命に基づく「第三の国」       |                      |                   |  |

三位一体説にもとづいて三つの時代に歴史を分割したフィオーレのヨアキムの黙示録解釈、特に十三～十四世紀におけるその熱狂的受容を批判的に継承しながら、啓蒙にもとづく人類の普遍的な教育という観点から第三の時代を「新しい永遠の福音の時代」として捉えた。こうした考えは、ヨアキムの影響が大きいとはいえ、もはや前近代的な宗教的思考とは言えない点で、「第三の国」は近代におけるネオ・ヨアキム主義の嚆矢となる。<sup>(59)</sup>

イタリアからドイツへと伝播したヨアキム思想の影響は、十九世紀後半にさらに北上し、ノルウェーのヘンリック・イブセン（一八二八～一九〇六年）において、近代的な弁証法的思考と融合して汎ヨーロッパ的に展開した。一八七三年に上梓された歴史劇『皇帝とガリヤ人』において、「知識の木」にもとづく古代ギリシアの世界と「十字架の木」にもとづくキリスト教の世界との確執、つまり、異教とキリスト教の確執を経て、「知識の木と十字架の木を一つにしてその上に建設されるべき帝国」の到来が、<sup>(60)</sup>つまり、両者を弁証法的に統合した「第三の国」の到来が求められている。しかも、ルードルフ・カスナーの指摘によれば、イブセンは序文において、「父の国」と「子の国」に続いて両国に取って代わることになる「第三の国」としての「精神の国」の到来を明言していた。そしてこの世界史劇は、一八八八年に出た独訳を通じて、ドイツ語圏におこつた「das dritte Reich」というドイツ語を流布させる役割を果たす。<sup>(61)</sup>

こうした役割の証左、そして、ネオ・ヨアキム主義のトランス・ナショナルな展開は、レーオ・ベルク（一八六二～一九〇八年）の著作『現代文学における超人』（一八九七年）に認められよう。というのも、同書では「神秘主義者たちがかつて告知し、今日では預言的な詩人たちが夢をみているものこそ第三の国」<sup>(62)</sup>であると述べられ、「第三の国のメシア」としてのイブセンと「人類の新しい第三の国」の先行者としてのドミトリー・メレシコフスキー（一八六六～一九四一年）が論じられていたからだ。<sup>(63)</sup> ロシアの象徴主義者であるメレシコフスキーは、「モス

クワは第三のローマである<sup>(65)</sup>』というロシア独自の黙示録解釈を復活させ、一八八四年（独訳、一九〇三年）公刊の小説『背教者ユリアヌス 神々の死』などの著作を通じて、異教とキリスト教、肉体と精神などの対立を統合する「第三の国」を求めた思想家であり、小説家であった。異教とキリスト教のジンテーゼとしての「第三の国」は、「キリスト教の最も秘められたる、最も深遠な思想——即ち終末の思想、第一の来臨を完成し充実させる第二の来臨の思想、その王国の後に来たらんとする聖霊の王国の思想<sup>(66)</sup>」として唱えられていたのである<sup>(67)</sup>。

十九世紀末のドイツ語圏において、ネオ・ヨアキム主義の思想的展開をレーオ・ベルクの次に果たしたのが、作家ヨハネス・シュラーフ（一八六二—一九四一年）であった。徹底的自然主義の代表者であるシュラーフは、一八九八年に友人のアルノー・ホルツと訣別し、次第に自然主義からある種の神秘主義に移行するなかで、ベルリン小説として『第三の国』を一九〇〇年に上梓したのである。物質主義とダーウイン主義に浸る主人公リーゼガングは、マックス・シュティルナーとフリードリヒ・ニーチェの思想を通じて、ヨハネの黙示録とヨハネの福音書の記述に新しい宗教感情を探り、「世界都市」で「新しい人間」像を求めていた<sup>(68)</sup>。もともと主人公は、画一的な空気の支配するベルリン市中心部から逃れるかのように都市の外れに行き、クロイツベルク地区のヴィクトリア公園へ向かい、公園の頂に聳えるネオ・ゴシック様式の記念碑を見て安堵の息をもらす。千年王国をめぐる神秘思想を信奉していた主人公は、それ以来、「第三の契約！」「新しい個人！新しい個性！——新しい男と新しい女！」「第三の人」を意識して求めることになる。シュラーフの場合、イプセンやメレシコフスキーの場合と異なり、「第三の国」やそれをめぐる比喩表現が多々あっても、「第一の国」や「第二の国」に関する言及は見当たらない。とはいえ、ネオ・ヨアキム主義における他の記述と同様、自分たちが「第二の国」の時代の終わりに位置していると認識し、その中である種の切迫感をもって「第三の国」が求められている。

上述のメレシコフスキーがワシリー・カンディンスキー（一八六六—一九四四年）やメラール・ファン・デン・ブルックやトーマス・マンに多大な影響を与えたことは、ネオ・ヨアキム主義の多様な展開を端的に示す。第一次世界大戦前にミュンヘンで活躍したロシア人画家は、終末論的パースペクティブのもとで、「純粋な」絵画の到来を「新しい精神の国」と見なしていた。カンディンスキーによれば、私たちの魂は「物質主義の長い時代からようやく目覚めつつある」が、いまだ「物質主義的な物の見方という悪夢<sup>(69)</sup>」にうなされ続けていたのである。カンディンスキーは、一九一三年、抽象絵画への移行を決意したとき、「今日はこの国が啓示された偉大なる日……。ここにおいて精神の偉大なる時代、精神の黙示が始まる。父—子—聖霊<sup>(70)</sup>」という文章を記し、抽象絵画への移行を「精神の国」の到来、「第三の黙示」の始まりと理解したのであった。<sup>(71)</sup> このようにカンディンスキーは「第三のローマ」説にもとづく「第三の国」を自らの抽象絵画に託したが、皮肉なことに、「第三の国」の理念が込められた絵画に「退廃芸術」の烙印を押したのが「第三帝国」だったのである。もともと、第一次世界大戦前にメレシコフスキーがパリに、カンディンスキーがミュンヘンに移住したことを考えると、かつて東と西に分離して、それぞれ独自の展開を遂げた「第三の国」という理念が再び出会い、新たな展開を遂げることになったと言える。二十世紀においてネオ・ヨアキム主義はトランス・ナショナルな展開を遂げたのである。

こうした展開の証左は、ドイツと同様にイプセンとメレシコフスキーの作品を通じて「第三の国」という言説が流布した日本にも認められよう。事実、イプセン没後の翌年である一九〇七年にイプセンが「第三王国の預言者」と称され、一九一三年に雑誌『第三帝国』が創刊され、一九一四年に「今や我国にも「第三帝国」の声は高い」と言われたのであった。しかも、雑誌『第三帝国』は、イプセンやメレシコフスキーが繰り返し扱われている点で文芸誌でもあるが、同時に、植民地主義的な大日本主義を否定し、満韓放棄論とも称された小日本主義や

民本主義や普通選挙の施行を支持した社会評論誌でもあった。同誌を刊行した茅原華山（一八七〇～一九五二年）によれば、第一帝国は明治維新までの日本、第二帝国は国家至上主義的な明治の日本であり、日本人による「新<sup>マ</sup>なる世界的帝国」が第三帝国と解されたのである。第一次世界大戦後にナチス・ドイツの別称となっていく「第三帝国」とは異なり、同名称が大戦前の日本において植民地政策を認めないデモクラシーと結びついていたのである。こうした潮流は、一方でナチス・ドイツの「第三帝国」と真逆の志向を示すが、他方でイブセンやメレシコフスキー受容という点でドイツにおけるネオ・ヨアキム主義と重要な共通点があったと言える<sup>(76)</sup>。

雑誌『第三帝国』のタイトルは、創刊号冒頭の「志を述べ」によると、「ヘンリック、イブセン及びパウリ、フリードリッヒの劇<sup>(77)</sup>」に由来した。また、茅原の「新第三帝国論」には、「第三帝国といへる思想は、イブセンやポール、フリードリッヒやメレヂュコフスキー等から来た<sup>(78)</sup>」という説明がある。もともと、「パウリ、フリードリッヒの劇」がいかなる作品であり、「ポール、フリードリッヒ」はいかなる人物であるかという問いに答える説明は、雑誌『第三帝国』に見当たらないばかりではなく、ナチス・ドイツの精神的な前史を扱う研究においても見当たらない。件の人物は、雑誌『第三帝国』の刊行三年前にあたる一九一〇年に『第三の国 個人主義の悲劇』を刊行したパウル・フリードリヒ（一八七七～一九四七年）であった。ドイツ本国においても今ではほとんど知られていないフリードリヒの劇作品は、その序文によると、十九世紀の物質主義を強烈に批判する「フリードリヒ・ニーチェ神話<sup>(79)</sup>」にはかならない。劇の最後では、北イタリアのトリノにある部屋で、深夜、幻視と幻聴に陥った孤独な哲学者ニーチェがツァラトウストラの声を聞く。「第三の国が自らの神を呼んでいる、汝の国に來たれ<sup>(80)</sup>！」と。劇を締めくくるその声は、ヨハネの黙示録の最後でヨハネがイエスに対して「来てください」と述べたように、「第三の国」の到来を望む。パウル・フリードリヒにおけるネオ・ヨアキム主義も自らの出自と深いつな

がりをもつのである。新理想主義に立脚するパウ・フリードリヒは「ニーチェの悲劇」をめぐる文化批判と「第三の国」をめぐる新たな理想を結びつける際、劇の序文によると、「私の忘れたい友人であり助言者でもあるレー・オ・ベルク」の影響を受けていた。一八九七年にドイツにおいて『現代文学における超人』を世に問うた前述の文芸評論家である。ここにおいても「第三帝国」以前の「第三の国」における多様な展開と深いつながりが認められるのである。<sup>(17)</sup>

こうした思想的潮流は、二十世紀前半にヴィーンで活躍した思想家ルドルフ・カスナー（一八七三―一九五九年）にも多大な影響をもたらしていた。西洋の合理主義に対する対蹠者<sup>アンチポッド</sup>であったカスナーは、リルケの親友であり、ホーフマンスタール、ヴァレリー、ジッドなどとも親交を結び、プラトン、ジッド、ゴーゴリ、トルストイ、ドストエフスキーなどの著作を独訳した人物であったが、オーストリア本国ならびにドイツにおいても、カスナーは忘れられて久しい。そのため、自らの特異な観相学を通じてネオ・ヨアキム主義と深い関わりをもっていたにもかかわらず、「第三の国」をめぐる考察においてカスナーが考察対象になることはなかったし、逆にカスナー研究において「第三の国」が取り上げられることも皆無に近かったのである。カスナーにとって、「第一の国」は近代以前の全一性にもとづく「存在の国」「同一性の国」「顔の国」であり、「第二の国」は近代的な分裂の中で生じた「尺度の国」「個性の国」「仮面の国」であり、「第三の国」は長い「回り道」を経ていた「自分自身」である。人間は「尺度の国」「仮面の国」から「存在の国」「顔の国」へと戻り、「間仕切りの壁」を打ち破って「第三の国」へ入らなければならないが、その国はただ予感されているにすぎない。人間は、それも近代の間は、他者という「回り道」をしてしか自分を知りえず、なかなか自分自身に行き着くことができない、とカスナーは考え西洋の合理主義的な近代を批判した。それだけにカスナーにおける「第三の国」は、近代におけるネ

オ・ヨアキム主義の弁証法的な思想と根本的に異なり、いわば回帰の思想であったと言える。しかも、私たちの外ではなく、私たちの内で展開する概念として「第三の国」を捉え直し、ネオ・ヨアキム主義のいわば内面化を促したのである。ただし、他の思想家たちと同様に「第四の国」を想定しておらず、「第三の国」を第三かつ最終の局面と見なしていた点を忘れてならない。

以上のような多岐にわたる展開の中で、第一次世界大戦の前後から「第三帝国」以前の「第三の国」を政治的な言説として用いる者も出始めた。その嚆矢の一人となるのが、一九一九年の「ドイツ労働者党」の設立に関わり、ヒトラーと出会った後、一九二〇年に「国民社会主義ドイツ労働者党」を立ち上げたデイトリヒ・エカルト（一八六八―一九二三年）であろう。劇作家であり、イプセンの翻訳者でもあったこの政治思想家は、自ら編集する新聞『一刀両断』*Auf gut Deutsch*の一九一九年七月五日版で「第三帝国」という言葉を反ユダヤ思想的な文脈で用いていたが、一九二三年十一月、エカルトはヒトラーとともにミュンヘン一揆を起こしたものの、鎮圧され、同年十二月、モルヒネ中毒による心臓発作で死亡するのであった。もともと、この年こそ、「第三の国」の系譜において重要な転機となる。というのも、「第三の国」という言葉をヒトラーにもたらししたのはエカルトの死亡年であるのみならず、ナチズムの「主著」となり、「運動のエリート」たちの心を捉えた著作<sup>(78)</sup>、すなわち、メラ・ファン・デン・ブルック（一八七六―一九二五年）の『第三の国』が刊行された年だからである。この国粋主義的なイデオログは一九〇四年に刊行した八巻本の著作『ドイツ人 我々の人類史』*Die Deutschen. Unsere Menschheitsgeschichte*で歴史の三分割をすでに行っていたが、一九一九年成立のヴァイマル共和国を認めない反動的な潮流の中で、「我々の国における西側を範にした議会政治の席巻<sup>(80)</sup>」を打破すべきであると考えてにいたって、「ライヒ」をめぐる三段階として、第一の神聖ローマ帝国、第二のドイツ帝国に続いて、ドイツ史を継続する「第



三の党」すなわち「第三の国」を求めたのである<sup>(81)</sup>。それはメラールにとって「新しい最終の国」<sup>(82)</sup>であり、「永久平和の思想」<sup>(83)</sup>でもあった。もっともこうした特異な政治思想も、「第三の国」の系譜と深いつながりをもつ。というのも、一九〇二年から一九〇六年の間にパリに滞在した際にメレシコフスキーと知り合い、一九〇六年から一九一九年までの間にメレシコフスキーの協力を得てドイツで最初のドストエフスキー全集を編纂したのも、メラールだったからだ。「第三帝国」<sup>(84)</sup>以前の「第三の国」は多種多様な展開を示しながらも、国境を越え、言葉を越えて、思わぬつながりを有するのであった。

こうしたつながりを自身の思想的変遷とともに最も複雑に示すのは、トーマス・マン（一八七五―一九五五年）である。マンは「第三帝国」Das Dritte Reichといわば戦った作家として知られるが、マンこそ生涯にわたり「第三の国」Das dritte Reichという言葉を標榜した思想家でもあった。マンは自作解説『フィオレンツァ』について（一九二二年）をこう締めくくる。「詩人は、常にいたるところでジンテーゼを、精神と芸術、認識と創造性、知性と単純、理性と魔術性、禁欲と美の和解を実現するのだ、つまり第三の国を」<sup>(85)</sup>と。このような意識は第一次世界大戦の勃発とともに一挙に政治化し、一九一五年のアンケート回答「ストックホルムの『スウェーデン日々新聞』編集部宛」などが端的に示すように、マンは「権力と精神のジンテーゼ」である「第三の国」をドイツにもたらずものとして戦争を理解し、「黙示録を夢みる」<sup>(87)</sup>ドイツを擁護した。そして、ドイツ敗戦が濃厚になるなかで自らの立ち位置を見失ったマンは、一九一八年十月に再読したメレシコフスキーの『トルストイとドストエフスキー』に自己の保守的理念を歴史的現実に適応させる拠り所を確認し始め、一九二二年二月の自著『ロシア文学アンソロジー』の中で、イブセンの「宗教哲学的な戯曲」にすでに見られる「第三の国」をめぐる戦い、つまり「新しい人間性と新しい宗教、精神の肉体化と肉体の精神化をめぐる戦いが、ロシア人の魂の中においてほど大胆

かつ切実に行われたところはどこにもないようだ<sup>(88)</sup>」と言う。メレシコフスキーを念頭においての発言であった。そして、一九二六年のパリ滞在中にメレシコフスキーの訪問を受けた際、その感動を『パリ訪問記』（一九二六年）に記す。こうしたマンの賛辞が生涯にわたって続いたことは、マンがメレシコフスキーから受けた影響がいかに深甚であるかを雄弁に物語っている<sup>(89)</sup>。しかし、ことは決して単純ではない。マンは、一九二二年十月の講演「ドイツ共和国について」で「宗教的人間愛の第三の国」das dritte Reich der religiösen Humanität<sup>(90)</sup>としての「共和国」を擁護し、一九二五年の講演「ドイツとデモクラシー」でもドイツ・ファシズムを弾劾するべくデモクラシーと融合した「第三の国」<sup>(91)</sup>を主張していた。こうした文脈を考えると、一九一三年七月から執筆され一九二四年九月に脱稿された『魔の山』にも「第三の国」の理念が強く働いていたと推測できよう。事実、「言葉の英雄」である作家の中から「第三かつ最終の精神の王国で人類を治める選ばれし人」が現れると主張するメレシコフスキーの影響を受けて、マンは、一九一九年四月十七日の日記によれば、『魔の山』の主人公を新しいものを求めている戦いに送り出すことにした。この発案は、『ドイツ共和国について』で「宗教的人間愛の第三の国」を創作において展開する試みだったと言えよう。だが、「第三の国」という言葉は『魔の山』に認められない。この事実を問題にする際、メラーが主催していた政治団体が問題になろう。ドイツで最初のドストエフスキー全集を編纂する際にメレシコフスキーに助力を請うたこの人物は、保守と革命のジンテーゼを説いた反動的な思想家でもあった。マンは、一九一八年十月十五日の日記においてラスコーリニコフに関するメラーの序文に関心を示し、この保守革命の理論家为中心的な役割を果たす「六月クラブ」<sup>(92)</sup>に出入りしていたが、一九二二年十月の講演以後は反動的な思想から距離を取ろうと努めたのである。こうしたマンの姿勢には、後に『ファウストゥス博士』において徹底的に行われる「第三帝国」批判の嚆矢が認められよう。だが、『魔の山』に限って言えば、「第三の国」に対するい

わば距離のバトスが複雑に潜在化されたと言えよう。おそらくマンは世界文学の中で自作に対する言及が最も多い作家であるだけに、その沈黙は多くを語る<sup>(96)</sup>。

一九二三年から一九三三年までの十年は、ナチス・ドイツ台頭の十年であるだけに、「第三帝国」という言説が流布した十年でもあった。政治的な概念使用のすえ、「第三の国」が「第三帝国」へと意味の変容をしていく十年とも言える。こうした潮流に抗うように、ヘルマン・ヘッセ（一八七七―一九六二年）は一九二七年の『荒野の狼』や一九三三年のエッセイ『神学断章』や『東方巡礼』などで「第三の国」に対する失われた信仰を再び得ようと試み<sup>(96)</sup>、トーマス・マンは、一九三〇年九月の国会選挙でナチスが十二議席から百七議席を獲得した一か月後、講演「理性に訴える」で「政治は第三帝国もしくはプロレタリア的終末論という大衆の阿片となり、理性は自身の顔を覆うのです<sup>かんはせ</sup>」と警告を発し、一九三二年にヴィーアの労働者を前にしてナチス・ドイツの誤用に対して「肉体性と精神性、自然性と人間性の統一」としての「完全な〈第三の国〉」を擁護した<sup>(97)</sup>。また、エルンスト・ブロッホ（一八八〇―一九五九年）は一九三五年の『この時代の遺産<sup>(98)</sup>』において「第三の国」の理念をまさに「革命」の側に取り戻そうとしたのである。このマルクス主義哲学者にとつて、フィオーレのヨアキムやレッシングが示したような旧約と新約にそくして歴史を三分割する思想はあまりにも古くさい。「けれども、その最後、つまり第三の時代は、社会主義革命が陽光と細密性との中でめざそうとしているのと同じ人間性の状態を、霧と一般性の中で提起したのだ」と言い、ブロッホは社会主義革命にもとづく「第三の国」を新たに継承しようとする。思想としての「第三の国」は、かつて「ブルジョアジーの勝利とともに消え失せ」たものの、その後、メラール・ファン・デン・ブルックの著作『第三の国』を通じて政治的に、そしてメラールが編纂したドイツ語版ドストエフスキー全集を通じて「文学的にも」甦ったものの、フィオーレのヨアキムやレッシングのそれとは違い、いまや

「燃えるような闇」「血と悪魔ばかりにみちみちた夜」にすぎなかった。また、イブセンの劇で皇帝ユリアヌスが多たらすはずであった「陽気な貴族の人間の第三の国」とも違っていたのである。プロッホはこのように「第三の国」をめぐるこれまでの言説を批判し、ナチス・ドイツの「第三帝国」を徹底的に断罪しながら、「第三の国」の理念を革命の側に取り戻そうとしたのであった。<sup>(99)</sup>

しかしながら、以上のような奪還の試みが複数あったにもかかわらず、その後、「第三の国」から「第三帝国」へと意味的変容は決定的になっていく。こうした潮流を決定づけたのは、『この時代の遺産』刊行前年にあたる一九三四年に刊行された『ドイツの伝説と文学における第三の国への憧憬』である。同年はヒトラーが「総統」という称号を公に使い始めた年であっただけに、同書はナチス・ドイツのプロパガンダである「第三帝国」にナチス・ドイツ以前にあった「第三の国」の系譜を取り込む決定的な学術書となった。著者のユーリウス・ペーターゼン（一八七八―一九四一年）は、一九二〇年からベルリン大学で近現代ドイツ文学の教授として活躍し、一九二七年から一九三七年までゲーテ協会の会長職を務めた当代きってのドイツ文学研究者だったのである。ペーターゼンはニーチェの超人思想を意識して言う。「最終目標が現在の視野に入ってきた」、そして、過去の夢はいまだ空間的にも時間的にも制約を受けているものの「永劫回帰をめぐる革命的な保守思想」<sup>(100)</sup>を通じて実現しつつあると。ペーターゼンの歴史認識は、一方でドイツの保守革命や国民社会主義と結びつき、他方で数千年にわたってヨーロッパで多様に展開してきた救済思想にもとづいていた。ナチスのプロパガンダに近づいたペーターゼンによれば、「鋼のような新しい総統像を待望する機運が立ち上がってきた」のであり、「待望され予言された総統は出現した」<sup>(101)</sup>のである。件の著作が締めくくられる際、シュテファン・ゲオルゲの詩集『新しい国』Das neue Reich（一九二八年）に所収された「戦争」の最終三行「たえず勝者は／守護の像を自らの国境地帯に宿す者／未来の主

は変転しうる者」が引用された。このようにしてペーターゼンはゲオルゲの詩と一九三四年に公にされた言葉「總統」をともに意識して「總統」に導かれた「新しい国」を「第三の国」として待望したのである。

「第三の国」をめぐるいわば争奪が一九三〇年前後にあったなかで、「第三の国」の理念はプロパガンダとしての「第三帝国」へと決定的に取り込まれていった。そうした「取り込み」を学術的に保証したのが、ペーターゼンであった。この碩学にはナチス・ドイツのイデオロギーに背いてユダヤ人の学者に対して援助をした面もあり、その点は今後とも慎重に事実確認をする必要がある。とはいえ、『ドイツの伝説と文学における第三の国への憧憬』はペーターゼンがナチス・ドイツのイデオロギーを学術的に支持した何よりの証左となる。その結果、フェルキツシュ思想そのものがかなり過小評価された戦後状況の中で、ペーターゼンの著作はナチス・ドイツの精神的な前史を探る研究においても概ね排除されてきた。しかしながら、「第三の国」という言説を同書以上に広く深く考察したものは、ペーターゼン以前の研究は言うに及ばず、戦後のナチス・ドイツ研究においても見当たらない。その結果、「第三帝国」を扱う研究が多数あるにもかかわらず、「第三帝国」以前の「第三の国」を扱う研究はきわめて少なくなってしまったのである。ペーターゼンの著作に取り組む現代的な意義は、ペーターゼンのように「新しい總統像」を再び待望するためではなく、むしろ、新たな「待望」の危険性にいち早く気づくことにあり、また、「第三帝国」以前の「第三の国」に取り組むことは、「第三帝国」を社会思想的に相対化することではなく、むしろ、「第三帝国」が受け入れられた反理性主義的な潮流を理性的に見極めるために行わなければならない。過去におけるフェルキツシュ思想の「取り込み」をあえて検討することは、将来におけるそうした「取り込み」の阻止に、さらには新たなファシズムや「新しい總統像」の台頭阻止に必ずつながる。フェルキツシュ思想の連続性をめぐる研究に不連続があつてはならない。

注

- (1) 芝健介『ヒトラー 虚像の独裁者』（岩波新書、二〇二一年、一一五頁）参照。
- (2) Vgl. Hermann Butzer: Das „Dritte Reich“ im Dritten Reich. Der Topos „Drittes Reich“ in der nationalsozialistischen Ideologie und Staatslehre. In: Der Staat. Vol. 42, Nr. 4 (2003), S. 620.
- (3) 『ヒトラーのテンプル・トーク 1941-1944』（上）、吉田八零監訳、三交社、一九九四年、二二三頁。
- (4) ドイツ語のカタカナ表記は原音に近い表記とするが、初出の際に括弧内に一般表記を示しておく。
- (5) 杉哲「西尾実と道元（Ⅸ）」、（熊本大学教育学部『人文科学』第六十号、二〇一一年、七三頁）参照。
- (6) Jacob Taubes: *Abendländische Eschatologie*. München 1991, S. 81.
- (7) ミルチア・エリアーデ『世界宗教史Ⅲ』（鶴岡賀雄訳、筑摩書房、一九九一年、一二二頁以下）参照。
- (8) 本書では、以下で述べるとおり、ナチス・ドイツのプロパガンダ（「第三帝国」*das Dritte Reich*）と第三の「ライヒ」をめぐるそれ以前の思想（「第三の国」*das dritte Reich*）とを区別するので、メラー・ファン・デン・ブルックの著者を、『第三帝国』ではなく、『第三の国』と称す。同書は、反民主主義的・反自由主義的な内容ゆえに、国民社会主義ドイツ労働者党と関連づけられることが多い。とはいえ、ナチスが「第三帝国」と自称するようになった契機は必ずしも同書ではなく、著者自身、国民社会主義ドイツ労働者党と距離をとっていた。ナチスの「第三帝国」という言説は、近年の研究によれば、一九一九年に「ドイツ労働者党」を設立し同年にアドルフ・ヒトラーと知り合ったディートリヒ・エカルトによるが、しかし、『第三の国』という言説が流布する重要な契機はやはりメラー・ファン・デン・ブルックの『第三の国』であった。Vgl. Claus-Eckehard Bäsch: *Die politische Religion des Nationalsozialismus. Die religiösen Dimensionen der NS-Ideologie in den Schriften von Dietrich Eckart. 2., vollst. überarb. Aufl.* München 2002, S. 53 ff. なお、メラー・ファン・デン・ブルックはドイツ語圏で Arthur Moeller van den Bruck と表記られることが多いが、一九〇四年以降、本人は Moeller van den Bruck と名乗り、一九二三年の著作でもこの表記を用いている。父親は Ottomar Moeller、母親は Elisabeth van den Bruck とつう名前であった。以下、メラーと略述することもある。Vgl. André Schlüter: Moeller van den Bruck. *Leben und Werk*. Köln u. Weimar 2010, S. V f.
- (9) 両者の区別が難しい場合、あるいは両者を共に含む場合は、「第三のライヒ」と称しておく。

- (10) ノーマン・コーン『千年王国の追求』、江河徹訳、紀伊國屋書店、二〇〇八年。
- (11) バーナード・マッギン『フィオーレのヨアキム 西欧思想と黙示録的終末論』、宮本陽子訳、平凡社、一九九七年。
- (12) Klaus Vondung: *Apokalypse in Deutschland*. München 1988.
- (13) Gerhard R. Kaiser (Hrsg.): *Poesie der Apokalypse*. Würzburg 1991.
- (14) Bernd U. Schipper u. Georg Plasger (Hrsg.): *Apokalypik und kein Ende?* Göttingen 2007.
- (15) ナチスの賛美や正当化が民衆扇動罪として厳しく禁止されているドイツでは、「第三帝国」のみならず、「第三帝国」以前の「第三の国」に関する考察も、細心の注意が必要となる。
- (16) 二〇二一年二〇二五年度科学研究費補助金基盤研究B「近現代ドイツの文学・思想における「第三の国」―成立・展開・変容―」(課題番号二三K二〇四五五、研究代表者 小黒康正) は、本来、前近代的な宗教思想であった「第三の国」が
  - (一) 近代的な社会思想としてドイツの啓蒙主義期にいかにかに成立したか、
  - (二) 十九世紀後半から第一次世界大戦期にかけていかに国際的に展開したか、
  - (三) その後「第三帝国」というナチスの思想へといかに変容したか、
 以上の三つの問いをめぐって、ドイツ側の協力を得て行われている国際的な共同研究である。
- (17) フィオーレのヨアキムに関する記述は、主に以下の三冊を参照した。Jochim von Fiore: *Das Reich des Heiligen Geistes*. Herausgegeben und eingeleitet von Alfons Rosenberg. Bleibheim 1977. マッギン、前掲書。マージョリ・リーヴス『中世の影響とその預言 ヨアキム主義の研究』、大橋喜之訳、八坂書房、二〇〇六年。
- (18) マッギン、前掲書、一九七頁。
- (19) 同右、二三七頁。
- (20) コーン、前掲書、二五頁。
- (21) Claus-Eckehard Bartsch: *Die politische Religion des Nationalsozialismus. Die religiösen Dimensionen der NS-Ideologie in den Schriften von Dietrich Eckart*. 2., vollst. überarb. Aufl. München 2002.
- (22) Thomas Mann: *Große kommentierte Frankfurter Ausgabe*. Hrsg. von Heinrich Detering u. a. Frankfurt a. M. 2002 ff., Bd. 10.1, S. 518.

- (23) マッギン、前掲書、五三頁以下。
- (24) 『聖書新共同訳』、日本聖書協会、一九九二年、四七二頁、ヨハネの黙示録第十七章九〜十。
- (25) 三位一体の三番目の位格である霊に関しては、とりわけ統一的な意味を見出しにくい。中村元監修、峰島旭雄責任編集『比較思想事典』（東京書籍、二〇〇〇年、一八一頁以下）参照。
- (26) Bärch, a. O.
- (27) ヨハネの黙示録に関しては、小黒康正『黙示録を夢みるとき トーマス・マンとアレゴリー』（鳥影社、二〇〇一年）の第一章において詳述した。ここでは、同書にもとづいて、必要最低限の説明を行う。
- (28) Mann, a. O., Bd. 10.1, S. 518.
- (29) Ebd., S. 519.
- (30) 世界各地の神話記述において創世をめぐる物語も終末をめぐる物語も枚挙にいとまがないが、冒頭に世界の始原をめぐる記述を有し、最後に世界の終末をめぐる記述を明確に有する「始原と終末の枠構造」は、聖書の比類なき特徴である。本章が示すこうした理解は、旧約聖書と新約聖書を積極的に結びつけて聖書全体を捉えようとする新たな聖書学の動向、すなわち「全聖書神学」Gesamt-biblische Theologie にもとづく。
- (31) 黙示録が最後に示す「新しいエルサレム」は、ある種のユートピア的空間であろう。しかしながら、ユートピアが静的であるとするならば、黙示録は動的である。語源的に「どこにもない場所」ou-topos であり、「森の空き地」Lichtung としても表象されるユートピアは総じて「場所」Topos を重視した「常套句」Topos として使われ、「目的」Telos なり「方向」Richtung なりが明確な黙示録は「時間」Kronos を重視した「常套句」Topos として使われてきた。
- (32) ヘブライズムの時間は、真木悠介によれば、アルケーとテロスによって区切られた線分として終末論をその起源としている。真木悠介『時間の比較社会学』（岩波書店、二〇〇三年、一五八頁以下ならびに一八三頁以下）参照。
- (33) Vondung, a. O., S. 65 ff.; Jacques Derrida: Apokalypse. Aus dem Französischen von Michael Wetzol. Graz Wien 1985, S. 33.
- (34) Vgl. Joachim von Fiore, a. O., S. 82 ff.
- (35) 栗生沢猛夫「モスクワ第三ローマ理念考」（金子幸彦編『ロシアの思想と文学』、恒文社、一九九七年、九一六一頁）参照。



- (36) Gotthold Ephraim Lessing: Werke und Briefe in zwölf Bänden. Hrsg. von Arni Schilson u. Axel Schmitt. Frankfurt a. M. 2001, Bd. 10, S. 97 u. 877 f.
- (37) Julius Petersen: Die Sehnsucht nach dem Dritten Reich in deutscher Sage und Dichtung. Stuttgart 1934, S. 30 f.
- (38) Ebd., S. 40.
- (39) Ebd., S. 38.
- (40) イブセン『原典によるイブセン戯曲全集』第三巻、原千代海訳、未来社、一九八九年、一九一頁以下。
- (41) 同右、一九五頁。
- (42) 同右、三三四頁。
- (43) 同右、三八二頁。
- (44) 同右、五〇五頁。
- (45) マンフレート・ルルカー『聖書象徴事典』（池田紘一訳、人文書院、一九八八年、一七六頁以下）参照。
- (46) 廣松渉ほか編『岩波哲学・思想事典』（岩波書店、一九九八年、五九一頁以下）参照。
- (47) ルルカー、前掲書、一七八頁参照。
- (48) 以下で『メールヒエン集』と呼ぶ同書は、初版（一八二二、一八一五年）から第七版（一八五七年）にいたるまで七つの版が刊行されただけではなく、十九世紀末にエーレンベルク修道院で発見された初稿（一八二〇年）もあり、併せて八つの稿がある。個々のメールヒエンを示す場合は、通常、原語表記の頭文字をとって **KEM** の略号とともに第七版の配列にもとづいて番号を示す。
- (49) 高橋吉文『グリム童話 冥府への旅』（白水社、一九九六年、五六頁以下）参照。
- (50) 高木昌史編『決定版 グリム童話事典』（三弥井書店、二〇一七年、三五〇頁以下）参照。
- (51) フロイト『人はなぜ戦争をするのか エロスとタナトス』（中山元訳、光文社古典新訳文庫、二〇〇八年、三五〇頁以下）参照。
- (52) ヨランダ・ヤコービ『ユング心理学』（高橋義孝監修、池田紘一ほか訳、日本教文社、一九七三年、八七頁）参照。
- (53) ユングにおける「三」と「四」の記述については、C・G・ユング『心理学と錬金術Ⅰ（新装版）』（池田紘一・鎌田道生訳、人文書院、二〇一七年、四四頁以下）参照。

- (54) C・G・ユング『結合の神秘Ⅰ』（池田紘一訳、人文書院、一九九五年、五六頁）参照。
- (55) 同右、二三七頁。
- (56) 同右。
- (57) オットー・ダン『ドイツ国民とナショナリズム1770～1990』（末川清・姫岡とし子・高橋秀寿訳、名古屋大学出版会、一九九九年、XI頁以下）参照。
- (58) 以下、研究代表者や研究分担者がこれまでに公表した論文をもとに、「第三の国」研究プロジェクトの成果をいわば中間報告として示す。
- (59) Vgl. Marcus Conrad: 'Teleologie' und Systemdenken. Geschichtsauffassungen der Spätaufklärung und die Wechselbeziehungen zwischen Geschichtstheorie und Literatur. In: Neue Beiträge zur Germanistik. Bd. 15 / Heft 2. Hrsg. von der Japanischen Gesellschaft für Germanistik. München 2016, S. 40-62.
- (60) イブセン、前掲書、一九一頁以下。
- (61) Vgl. Rudolf Kassner: Sämtliche Werke. Im Auftrag der Rudolf Kassner Gesellschaft herausgegeben von Ernst Zinn u. Klaus E. Bohnenkamp. Pfullingen 1969 ff., Bd. IV 393.
- (62) 小黒康正「第一次世界大戦期の日本とドイツにおける「第三の国」イブセン、メレシコフスキー、トーマス・マン」（日本独文学会『ドイツ文学』第一五四号、二〇一六年、一〇三～一二二頁）参照。
- (63) Leo Berg: Der Übermensch in der modernen Literatur. Ein Kapitel zur Geistesgeschichte der modernen Literatur. Paris, Leipzig u. München 1897, S. 74.
- (64) Ebd., S. 111.
- (65) メレシコフスキー『トルストイとドストイェーフスキーⅢ』、植野修司訳、雄渾社、一九七〇年、一七頁。
- (66) 同右、三二八頁。
- (67) Vgl. Yasumasa Oguro: Der Kampf um das Dritte Reich vor dem Ersten Weltkrieg. Die Dmitri Merezhkovski-Rezeption in Deutschland und Japan. In: Tagungsband der «Asiatische Germanistentagung 2016 in Seoul» - Bd. 1. Bern 2022, S. 113-122.

- (68) Vgl. Johannes Schlaf: Das dritte Reich. Ein Berliner Roman. Berlin 1900.
- (69) Wassily Kandinsky: Über das Geistige in der Kunst. 10. Aufl., mit einer Einführung von Max Bill. Bern 1952, S. 22.
- (70) Christoph Schreier: Wassily Kandinsky. Bild mit schwarzem Bogen. Frankfurt a. M. u. Leipzig 1991, S. 27.
- (71) Vgl. Yasumasa Oguro: Neo-Joachismus auf der „geistigen Insel“ in München. Kandinsky, Mereschkowski und Thomas Mann. In: Publikationen der internationalen Vereinigung für Germanistik (IVG). Akten des XII. internationalen Germanistenkongresses Warschau 2010. Vielheit und Einheit der Germanistik weltweit. Hrsg. von Franciszek Gruza. Bd. 14. Frankfurt a. M. 2012, S. 451-457.
- (72) 小黒康正「ネオ・ヨアキム主義における東西交点としての『第三の国』 メラー・ファン・デン・ブルック、日本の雑誌『第三帝国』、パウル・フリードリヒ」(慶應義塾大学藝文学会『藝文研究』第二二五号、二〇二三年、二六〇-四三頁) 参照。
- (73) 茅原華山ほか編『第三帝国』、全十冊、復刻版、不二出版、一九八三―一九八四年、第一巻冒頭。
- (74) 茅原華山「新第三帝国論」、『益新会同人編』『第三帝国の思想』、一九一五年、三四頁以下。
- (75) Paul Friedrich: Das dritte Reich. Die Tragödie des Individualismus. Leipzig 1910, S. IX.
- (76) Ebd., S. 99.
- (77) 小黒康正「パウル・フリードリヒ『第三の国 個人主義の悲劇』について 訳者解題として」(九州大学独文学会『九州ドイツ文学』第三十五号、二〇二二年、七一―八一頁) 参照。
- (78) Vgl. Bartsch, a. a. O., S. 57 f.
- (79) エルンスト・ブロッホ『この時代の遺産』(池田浩士訳、ちくま学芸文庫、一九九四年、九十六頁ならびに六二二頁) 参照。
- (80) Moeller van den Bruck: Das dritte Reich. Berlin 1923, S. iii.
- (81) Ebd., S. 244.
- (82) Ebd., S. 258.
- (83) Ebd., S. 257.
- (84) Vgl. Yasumasa Oguro: „Das dritte Reich“ vor der NS-Zeit in Ost und West. Von Berlin 1923 über Tokio 1913 bis nach Berlin 1900. In: Berlin im Krisenjahr 1923: Parallelwelten in Literatur, Wissenschaft und Kunst. Würzburg 2023, S. 253-267.

- (85) Mann, a. a. O., Bd. 14.1, S. 349.
- (86) Mann, a. a. O., Bd. 15.1, S. 129 u. 136.
- (87) Mann, a. a. O., Bd. 15.1, S. 929 u. Bd. 19.1, S. 569.
- (88) Mann, a. a. O., Bd. 15.1, S. 341.
- (89) Vgl. Urs Heftich: Thomas Manns Weg zur slavischen Dämonie. Überlegungen zur Wirkung Dmitri Mereschkowski. In: Thomas Mann Jahrbuch, Bd. 8, Frankfurt a. M. 1995, S. 71-91.
- (90) Mann, Bd. 15.1, S. 553.
- (91) Ebd., Bd. 15.1, S. 948.
- (92) 論者が一九九六年にチューリヒの「トーマス・マン資料館」で行った文献調査によれば、引用箇所にはマン自身にも下線と感嘆符が記われている。<sup>90</sup> Dmitri Mereschkowski: Tolstoi und Dostojewski als Menschen und als Künstler. Eine kritische Würdigung ihres Lebens und Schaffens. Übers. von Carl von Gutschow. Leipzig 1903, S. 115.
- (93) Vgl. Mann, a. a. O., Bd. 15.2, S. 161.
- (94) Vgl. Volker Weiß: Dostojewskijs Dämonen. Thomas Mann, Dmitri Mereschowski und Arthur Moeller van den Bruck im Kampf gegen „den Westen“. In: Völkische Bande. Dekadenz und Wiedergeburt – Analysen rechter Ideologie, Hrsg. von Heiko Kauffmann, Helmut Kellersohn u. Jobst Paul, Münster 2005, S. 90-122, bes. S. 98; André Schlüter: Moeller van den Bruck. Leben und Werk. Köln, Weimar u. Wien 2010, S. 302 ff.
- (95) 小黒康正『黙示録を夢みるとき トーマス・マンとアレゴリー』、小黒康正「第一次世界大戦期の日本とドイツにおける「第三の国」 イブセン、メレシニコフスキー、トーマス・マン」参照。Vgl. Yasunasa Oguro: Neo-Joachismus auf der „geistigen Insel“ in München. Kandinsky, Mereschowski und Thomas Mann.; Yasunasa Oguro: Der Kampf um das Dritte Reich vor dem Ersten Weltkrieg.
- (96) Vgl. Theodore Ziolkowski: Hermann Hesse's Chiliasitic Vision. In: Monatshefte, Vol. 53, Nr. 4 (1961), University of Wisconsin Press, pp. 199-210.
- (97) Thomas Mann: Gesammelte Werke in dreizehn Bänden, Frankfurt a. M. 1990, Bd. XI, S. 880 ff. u. S. 897.
- (98) 同書からの引用は、ヘルムスト・プロッホ、前掲書、六一〇頁以下にみとめて。

- (99) 吉田治代「黙示録、ユートピア、遺産——プロットホにおける「第三の」ライヒ」論」(日本独文学会『ドイツ文学』第二五四号、二〇一六年、八二—一〇二頁) 参照。
- (100) Petersen, a. a. O., S. 1.
- (101) Ebd., S. 61.
- (102) Vgl. Petra Boden u. Bernhard Fischer: Der Germanist Julius Petersen (1878-1941): Bibliographie, systematisches Nachlaßverzeichnis und Dokumentation. Marbach 1994, S. 23.
- (103) Vgl. Walter Killy u. Rudolf Viehhaus, a. a. O., S. 619.